

第30回関西アルコール関連問題学会

京都大会

2024年11月23日(土)~24日(日)



支え合う明日へ 大会プログラム集

会 場 : 同志社大学 新町キャンパス尋真館
大 会 長 : 京都府立洛南病院 院長 吉岡隆一
事 務 局 : 医療法人稻門会 いわくら病院 事務局長 今岡岳史

TEL:075-711-2171(代表)

Email:kyoto2024kanarugakkai@gmail.com

MEMO

第30回 関西アルコール関連問題学会 京都大会開催に向けて

吉岡隆一（京都府立洛南病院）

このたび、第30回関西アルコール関連問題学会京都大会を、令和6年11月23日（土）から11月24日（日）の両日、同志社大学の新町キャンパス尋真館にて開催させていただくことになりました。

2020年から始まったコロナ禍は、社会経済的影響とともに、人々の生活の形に作用してアルコール依存症の現れにも強く影響を与えたと思われます。京都での身体科精神科医療連携の場であるG Pネット（2022）では総合病院精神科でのアルコール関連障害の激増が報告されていました。京都府の630調査を見てもアルコール関連障害による退院者数は2022年に前年度前々年度の25から跳ね上がり、40台を超えて2023年度にもさらに上昇しています。

当院は従来精神科救急基幹病院として薬物依存症を軸にしたかかわりを求めてきましたが、こうした趨勢と軌を一にして、2022年度には前年比1.5倍のアルコール関連障害の入院となり、おそらく2023年度からアルコール専門外来を独立開設したところです。

当院の受診相談全般ではほかにもギャンブル依存がひどく目を引く増加ですし、児童のODなどもしかりで、依存ないし嗜癖は、ますます多様な場面で多彩な現れをしています。

ちょうど本年度から、依存症計画は中間見なおしされ、保健医療計画も改定されるなど節目の年にもあたっています。

今回の大会テーマは、「つながりあう今日と（京都）、支えあう明日へ - アディクションからコネクションへ」 とうたわれております。

特別講演では 杠岳文先生には「アルコール健康障害：飲酒関連死から予防まで」と題して広い視野からお話を頂いて、シンポジウムを行います。

基礎講座ではいわくら病院今岡先生から、基本を教えていただきます。

各分科会は、当事者同士、家族同士、支援者同士、またそうした立場を横断した柔軟な二重三重のつながりを作り出せるかという、実際的な問題意識を反映したものになっています。

ワークショップでは家族支援や動機付け面接を扱う予定です。

学会運営には不慣れなまま、依存症は大事ということだけで大会長をお引き受けしましたので、運営上ご迷惑をおかけすることもあるうかと思いますがご理解のほどよろしくお願ひいたします。

また、新生会和氣浩三先生、実行委員会の皆様、講師をお引き受けいただいた先生方、ご協力いただいたすべての方にあらためてお礼を申し上げます。

参加者の皆様にとって、それぞれが尊重しあえる交流も、新鮮なキーワードによる活発な議論も、基本に立ち返った着実な習得も、どれもが可能な開かれた学会になることをねがってやみません。

第30回関西アルコール関連問題学会 京都大会 プログラム

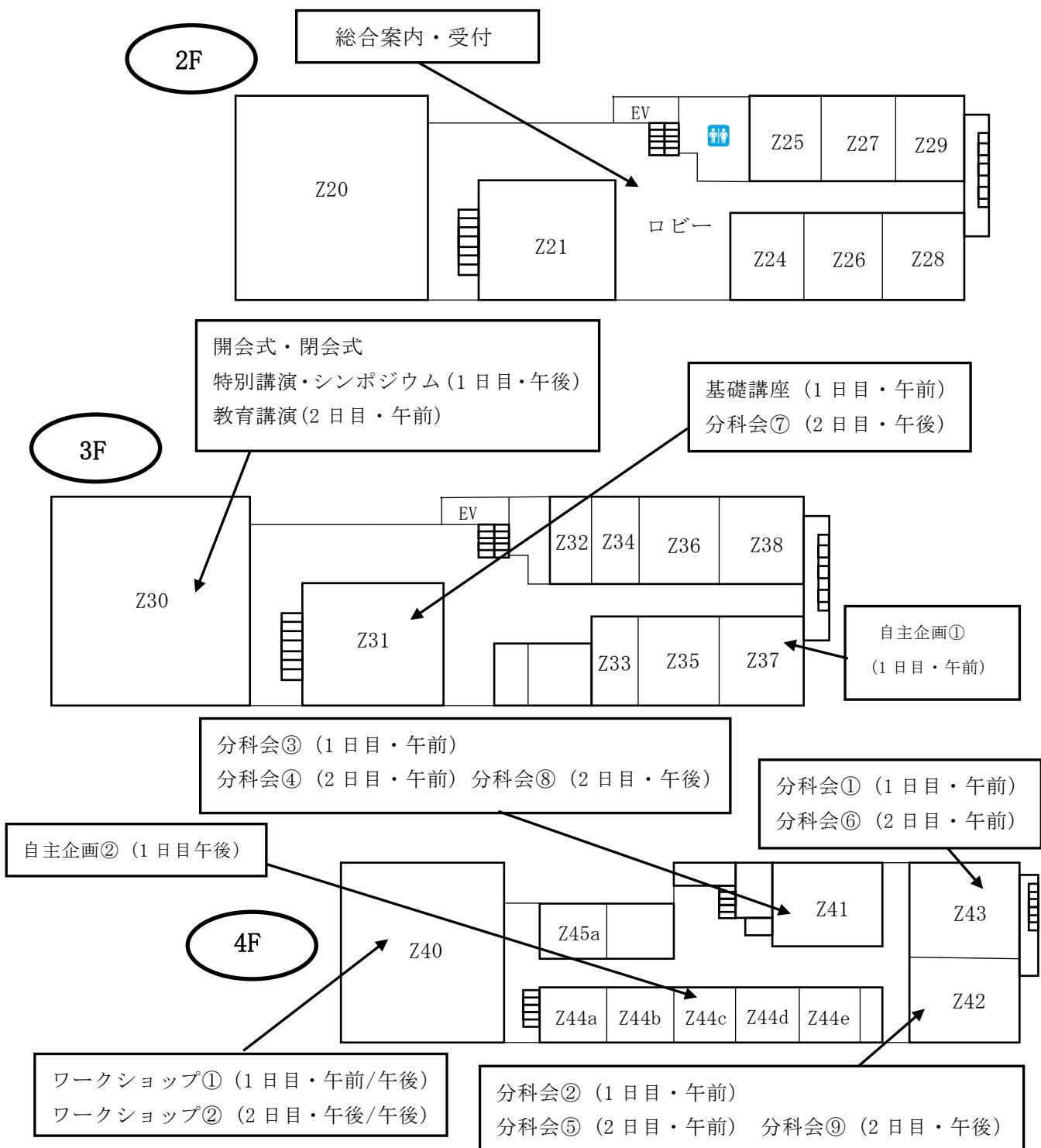
11月23日（土） 1日目

10：00～10：20	開会式	尋真館 Z30
10：30～13：00	基礎講座	尋真館 Z31
10：30～13：00	分科会① アタッチメントとアディクション ～子ども支援と連携について現場の本音を語る～	尋真館 Z43
10：30～13：00	分科会② 地域・在宅における依存症回復支援 ～つながり続ける意義を考える～	尋真館 Z42
10：30～13：00	分科会③ ギャンブル障害支援再考	尋真館 Z41
14：00～15：30	特別講演 アルコール健康障害：飲酒関連死から予防まで	尋真館 Z30
15：40～16：30	シンポジウム	
10：30～16：30	ワークショップ① 依存症を抱える本人やその家族への関わり方 ～CRAFT を参考に学び合い、考える～	尋真館 Z40
10：30～13：00	自主企画① 郊外における依存症関連問題について～取組と課題～	尋真館 Z37
12：00～15：00	自主企画② 大学生が開発したシリアルスゲーム ドランクディスティニ一体験会	尋真館 Z44cde

11月24日（日） 2日目

10：00～12：30	教育講演 やめさせようとしない依存症支援～信頼関係を築くために～	尋真館 Z30
10：00～12：30	分科会④ 今こそ、家族支援を	尋真館 Z41
10：00～12：30	分科会⑤ つながりにくい当事者に悩んでいませんか ～メンタライジング・アプローチの勧め～	尋真館 Z42
10：00～12：30	分科会⑥ 相談拠点と治療拠点・専門医療機関、時代とともに変わりゆく課題	尋真館 Z43
13：30～16：00	分科会⑦ ギャップはどこにあるのか？ トリートメントギャップを埋める取り組み ～京都府北部・専門医療機関のない地域における実践を通して～	尋真館 Z31
13：30～16：00	分科会⑧ ハームリダクションについて考える	尋真館 Z41
13：30～16：00	分科会⑨ 自助グループを知る～体験談を通して依存症支援を考える～	尋真館 Z42
10：00～16：00	ワークショップ② 明日から使える動機付け面接 ～アルコール依存症に関わる原点として～	尋真館 Z40
16：00～16：30	閉会式	尋真館 Z30

同志社大学 新町キャンパス尋真館 会場案内



*都合により会場が変更となる場合もございます。ご了承ください。

特別講演 11月23日（土）14：00～15：30 尋真館Z30

「アルコール健康障害：飲酒関連死から予防まで」

特別講演は、肥前精神医療センター名誉院長・筑後吉井こころホスピタル院長の杠 岳文先生に「アルコール健康障害：飲酒関連死から予防まで」というテーマでご講演いただきます。

アルコール依存症の予防と早期介入を目的とした HAPPY プログラムの開発（初版 2001 年）でも知られる先生から、これまでのご実践の数々をそこに至られる先生ご自身の体験もまじえながらお話しitただく予定です。みなさまのご参加をお待ちしています。

【司会・コーディネーター】

廣兼 元太（広兼医院 医師）

【講師】

杠 岳文（肥前精神医療センター・筑後吉井こころホスピタル 医師）

シンポジウム 11月23日（土）15：40～16：30 尋真館Z30

シンポジウムでは、アルコール依存症の予防・早期対応や治療・回復支援の実際、現場での思いや工夫、活動で大切にされていることなどを、杠先生を含む 5 名のシンポジストの方から伺います。大会長の洛南病院の吉岡 隆一先生と学会長の新生会病院の和気 浩三先生には、依存症専門医療機関の立場から、豊郷病院の波床 将材先生（前京都市こころの健康増進センター所長）には、行政として予防啓発や当事者・家族支援を続けられてきた立場から、同志社大学の野村 裕美教授には医療ソーシャルワーカー育成にあたられる教育機関の立場からご登壇いただきます。みなさまと今後の治療・支援のあり方と一緒に考える機会にできればと思います。

【司会・コーディネーター】

廣兼 元太（広兼医院 医師）

【シンポジスト】

杠 岳文（肥前精神医療センター・筑後吉井こころホスピタル 医師）

吉岡 隆一（京都府立洛南病院 医師）

波床 将材（公益財団法人 豊郷病院 医師）

和気 浩三（新生会病院 医師）

野村 裕美（同志社大学社会学部 教授）

基礎講座 11月23日（土）10：30～13：00 尋真館Z31

—初心者向けのアルコール医療講座—

アルコール依存症の治療経験がなくこれから取り組もうと考えておられる初心者向けの講座です。日本にはアルコール依存症が100万人以上と推計されていますが、専門医療機関でアルコール依存症と診断され治療を受けている方、4～5万人しかいません。できるだけ多くの患者さんが早期に専門医療機関に繋がり適切な治療を受ける事ができるようになることが大きな課題です。医療現場の実践をいわくら病院を例に挙げ説明したいと思います。その他、初心者の方が押さえたい知識を疫学、診断、症候学、身体合併症、精神科合併症、薬物療法、入院治療、自助グループとの連携、予後などの項目に沿ってお話ししたいと思います。

後半は当事者、および家族の方々より体験談とこれからアルコール医療に携わる方へのメッセージを発表して頂く予定です。

【司会・コーディネーター】

須堯麗子(稻門会いわくら病院 精神保健福祉士)

【講師】

今岡岳史(稻門会いわくら病院 生活支援科長)

【話題提供】

南重純(京都府断酒平安会会长)

竹田美貴子(京都府断酒平安会家族会「みやび」会員)

瀧田和彦(京都府断酒平安会伏見支部会員)

分科会① 11月23日（土）10：30～13：00 尋真館Z43

アタッチメントとアディクション

～子ども支援との連携について現場の本音を語る～

子ども支援や依存症支援に携わっておられる皆さん、日ごろの支援や連携に難しさを感じることはないでしょうか。領域の違いにより支援の方向性の違いやスピード感の差など、様々な場面で困難が生じた経験はないでしょうか。家族まるごと支援が目指される中、依存症家庭における家族まるごと支援とは何でしょうか。

本分科会のテーマに挙げているアタッチメントとアディクションには共通点があるのではないかと考えています。アタッチメントとは「愛着」とも訳されてきており、子ども支援の現場では重要な視点とされています。精神科医ボウルビィはアタッチメントについて「生物個体が危機的状況に接し、あるいは潜在的な危機的状況を予知し、不安や恐れといったネガティブな情動が強く喚起されたときに、特定の他個体への接近を通して、主観的な安全の感覚を回復・維持しようとする行動システム」としています。

また、心理学者カンティアンは「依存症者が依存にふける理由は苦痛を避けるためであり、自分で自分の落ち込んだ気分を直そうとする、いわば『自己治療』なのではないか」という仮説を提唱しています。両者に共通するのは、自分を守るために安心や安全を求めて行動するという点ではないか、行動に共通点があるのであれば支援の方向性にも共通点を見出し、連携をしやすい関係づくりができるのではないかと考えています。

本分科会ではアタッチメントとアディクションという切り口から、子ども支援領域と依存症支援領域の皆さんのが連携しながら、家族まるごと支援を実践していくためには何が必要なのかとともに考える機会になればと思っています。各話題提供者がそれぞれの立場から、アディクションと子ども支援についての発表した後、会場の皆さんとともに多彩な意見交換をできればと思っております。多くの方のご参加をお待ちしております。

【司会・コーディネーター】

亀ノ上 美郷（新阿武山病院 精神保健福祉士）

【話題提供】

村井 琢哉（山科醍醐こどものひろば 社会福祉士）

荻野 勝己（尼崎市こども相談支援課 参事）

塚本 真代（大津・高島子ども家庭相談センター 児童福祉司）

分科会② 11月23日（土）10：30～13：00 尋真館Z42

地域・在宅における依存症回復支援

～つながり続ける意義を考える～

アルコール健康障害対策基本法が2014年に施行されてすでに10年が経過する。少しづつではあるが社会全般に依存症についての正しい理解が広がりを見せる一方で、まだまだ専門医療機関につながらない方や、自宅に引きこもったままで飲酒をやめられない方、一般病院に受診しながらも飲酒がやめられない方がいることがうかがえる。

そして、地域や在宅などで支援に携わる訪問介護や訪問看護、相談支援など支援者の方々は、そのような飲酒問題に触れたとき、どのように当事者や家族の方々と関わるべきなのか、どのように支援につなげるべきなのだろうかと日々悩み続けている。アルコール依存症は人を孤独にする病気と言われており、本人や家族だけではなく、そこに関わる支援者までも孤立させてしまうことが考えられる。

今回、「地域・在宅における依存症回復支援～つながり続ける意義を考える～」の分科会では、さまざまな立場や職種の支援者により、地域や在宅でのアルコール依存症の回復支援に携わる実際について話題提供をいただき、「アディクションからコネクションへ」といわれるよう依存症回復支援にみられる「つながり」についての意義を考える機会となることを期待する。そして、分科会に参加される方々とともに支援の輪を広げることができればと考える。

【司会・コーディネーター】

杉山昌儀（いわくら病院 精神科認定看護師）

【話題提供】

小西奈央子（支援センターらくなん 精神保健福祉士）

実森裕介（みつばち訪問看護ステーション 精神科認定看護師）

百々昭人（いわくら病院訪問看護ステーションいなほ 作業療法士）

藤田隼介（訪問看護ステーションまるっと 看護師）

分科会③ 11月23日（土）10：30～13：00 尋真館Z41

ギャンブル障害支援再考

ギャンブル障害は物質依存症との類似点が古くから知られ、自助グループやごく一部の医療機関などが支援にあたっていた。2016年のIR推進法の制定に伴いギャンブル障害対策が謳われ、翌2017年より各都道府県で依存症総合対策事業が実施されることとなった。その一環として依存症拠点医療機関・専門医療機関が多数選定される中で、ギャンブル障害に対する認知行動療法ベースのプログラムが実施されるようになった。そのようなプログラムの多くは標準化されたワークブックに基づいているが、実際の進行に関しては運営スタッフの裁量に委ねられる部分も多く、独自のワークブックを作成している医療機関もある。また、医療機関ごとの患者層の違いも考えられる。本分科会では京都やその近郊でギャンブル障害患者の支援に力を入れている専門医療機関からそれぞれのプログラムなどについて話題提供いただき、特徴を明らかにしていく。また、依存症対策総合支援対策事業開始前からギャンブル障害患者支援にあたってきた京都マックでのこれまでの経緯や取り組みについても話題提供していただき、今後のギャンブル障害支援を多角的に検討する予定である。

【司会・コーディネーター】

鶴身 孝介（京都大学 医師）

北山 紗恵子（安東医院 精神保健福祉士）

【話題提供】

入来 晃久（大阪精神医療センター 医師）

濱川 浩（滋賀県立精神医療センター 医師）

柴田 真美（京都大学 医師）

北山 紗恵子（安東医院 精神保健福祉士）

吉岡 敏克（京都マック 宿泊型自立訓練 管理者）

ワークショップ① 11月23日（土）10：30～16：30 尋真館Z40

依存症を抱える本人やその家族への関わり方

～CRAFT を参考に学び合い、考える～

依存症は適切な治療と支援を受けることで回復が十分に可能な病気である。

しかし、本人や周囲の人々は、依存症の正しい知識や対応を知る機会がないまま、問題の解決に奔走していることも少なくない。問題が進行すると、自殺、失職、家庭崩壊等、深刻な社会問題に発展していく。

支援者は依存症やその支援に関する知識や対応を学び、本人や家族と関わることが大切である。「家族支援は本人支援、本人支援は家族支援」と言われるように、双方への継続的な支援が問題解決へと繋がる。求められているのは、「本人が病院に繋がらなければどうしようもない」ではなく、「どうしたらよいか、一緒に考えましょう」と言える関わりである。

しかし、臨床現場で有効な対応を学ぶ機会は少ない。学び続ける機会はもっと少ない。

本ワークショップでは、その機会の1つとなるべく、CRAFT を参考にして関わり方を学び、考える。

CRAFT (Community Reinforcement And Family Training) は、アルコールやドラッグ漬けのライフスタイルよりそれらを使用しない生活の方が実りが多いと思えるよう本人の環境を変えることを目的としたプログラムで、1970年代に生まれた物質使用障害に対する行動療法である CRA (Community Reinforcement Approach) が発展したものである。米国でメイヤーズらによって開発され、カナダではギャンブル依存症の家族にも応用され、わが国ではひきこもりの家族支援として厚労省のガイドラインにも提示されている。エビデンスも蓄積されており、患者の治療導入率比較研究では、家族に自助グループへの参加を勧めるやり方の成功率が約 10%、古典的な直面化技法である Johnson モデルの成功率が約 30% であるのに比べ、CRAFT の成功率は 64% を越えている。

CRAFT の目標は3つある。

- ① 本人のアルコールや薬物使用を減らす
- ② 本人を治療に誘う
- ③ 家族の幸福と機能を高める

これまでうまくいかなかつた関わりを、効果のある新しい関わりに切り替える。相手を変えようとすることを止め、自分の考え方と関わりを修正することで、相手との関係性とその環境を変えていく。

本人が治療や相談に繋がった後にも効果を發揮し、事態が好転しなくとも家族が元気になっていく。支援者も効果的な考え方を身につけることで支援の質が変わることを実感して、スキルアップにも役立つ。

一律の対応ではうまくいかない。多角的な視点を持って臨機応変に対応することの大切さを実感できるワークショップにしたい。

【講師・ファシリテーター】

- 吉田 精次（社会医療法人あいざと会 藍里病院）
古田 和弘（医療法人和光会 一本松すずかけ病院）
齊藤 栄喜（医療法人芳州会 村井病院）
上村 真実（林道倫精神科神経科病院）
佐藤 周（滋賀県立精神医療センター）

自主企画① 11月23日（土）10：30～13：00 尋真館Z37

京都府北部地域における依存症関連問題～取組と課題～

京都市と京都府南部地域では、依存症の専門医療機関が複数存在しており、自助グループもアクセスしやすい場所にある。治療を続け、生活を維持していくには、恵まれた環境といえる。

他方、それ以外の地域でも、依存症の問題は確かに存在しており、社会資源が少ない中で、取り組まれている。そこでの地域特有の事情は、どのようなものか。専門医療機関がない中で、自助グループが少ない中で、どのように工夫されているのか。どのような苦労があり、どのような特色があるのか。あるいは、専門の機関との連携はどのようになっているのか。

今回、京都大会にちなみ、京都府北部の中丹東圏域（舞鶴市・綾部市）を取り上げる。依存症関連問題の取組と課題について、それぞれの行政職員の方から、報告をしていただく。その後、課題や展望について、参加者の皆様とともに意見交換ができる時間としたい。

私たちがこうした地域の事情を学びつつ、互いに顔を突き合わせることで、より深いネットワークづくりと、クライエントに対して連続性のある支援ができるのではないかと考えている。

社会資源が少ない中でも奮闘している支援者、専門機関と生活地域との連続性を考えている支援者には、ぜひ御参加いただきたい。

なお、本企画は京都マックの自主企画としての開催である。

【司会・コーディネーター】

岡 正徳 (NPO法人 京都マック)

入江 泰 (NPO法人 京都マック)

【報告者】

熊取谷 晶 (京都府中丹東保健所福祉課 課長)

吉松 正人 (綾部市障害者支援課 担当長)

【指定発言者】

石原 智 (京都府中丹東保健所福祉課 精神保健福祉相談員)

自主企画② 11月23日（土）12：00～15：00 尋真館Z44cde

シリアスゲーム ドランクディスティニー体験

みなさん、シリアスゲームを知っていますか？野村ゼミでは、「アルコールと、社会問題と私」をテーマに、わがごととしてのアルコール関連問題について社会福祉学の立場から学びを深め、京都府断酒平安会、家族会みやびの方々等に協力をいただきながら啓発のためのゲーム作りに取り組んできました。また、ゲーム大会の開催を通して、さまざまな方々との啓発交流の場づくりに取り組んできました。本大会では、11月23日（一日目）に会場の一角をお借りし、開発した学生たちがナビゲーターとなり、シリアスゲーム「ドランクディスティニー」のロールプレイングの世界へと導きます。大会の合間にのぞいていただければ幸いです。

シリアスゲームとは、社会問題の解決を疑似体験するゲームを指し、2000年前半に登場したものである。「社会的な問題解決のためのゲームの開発・利用を総称することにより、従来の教育・学習ゲームやシミュレーションなどの各分野で主に教育的な文脈で扱われてきたゲームの応用の可能性を広げる試み」（藤本徹 2023）を指し、すでにさまざまなゲームが開発されている。

ゲームリテラシーに関する調査を実施した財津康輔らは、「ゲームを作る」能力が「ゲームに関する意味を理解する」能力を基礎として培われること、「ゲームを用いた実践をする」「ゲームを伝える」などの活動が含まれることを発見し、社会的なる力の涵養にゲームリテラシーの活用可能性があることを指摘した（2023：220）。

本ゼミでは、財津らの指摘をふまえ、第一に、ゲーム開発のプロセスが、社会問題や生きづらさを生む社会構造の理解を促すこと、第二に、ゲームには「作ること」と「プレイすること」の二つの価値があることに着目し、大学生（若者）が「シリアスゲーム開発プロセス」を通して、社会問題の当事者や多様なアクターと構築するパートナーシップを基礎に、社会問題に立ち向かう素養を獲得できるとの仮説を立て、2023年度より取り組んでいる。この素養は、今の社会において若者（大学生）が生き抜く力（ライフスキル）に必要な要素であると考える。

【コーディネーター】

同志社大学社会学部社会福祉学科野村ゼミ 3回生・4回生

野村裕美（同志社大学社会学部 教授）

- ・取り組み 令和5年度 京都府アルコール健康障害対策学生啓発リーダー養成事業
令和6年度 同志社大学諸君ヨ、人一人ハ大切ナリ SDGs研究プロジェクト
- ・協力者 松田美枝氏（京都文教大学臨床心理学部）
武内伸雄氏（突破計画/京都芸術大学）
財津康輔氏（日本大学生産工学部）

教育講演 11月24日（日）10：00～12：30 尋真館Z30

やめさせようとしない依存症支援～信頼関係を築くために～

依存症からの回復において必要なものは何か。また、支援者に必要とされるることは何か。依存行為により生活や身体に問題が生じている状況に出会うと、依存行為をやめさせることに焦点が当たりやすい。しかし、本当に必要な支援とは依存行為をやめさせることなのか。

「依存症患者への対応のコツをひとつ上げるとしたら、それは『やめさせようとしないこと』である。この逆説的ともいえる対応に、依存症という病気の本質がみてとれる。やめさせることを目的とせず、患者の苦しいことやつらいこと、困っていることを患者と一緒に考え、患者を支援していくことに重きを置くことこそが、依存症支援では大切なことである」と講師である埼玉県立精神医療センターの成瀬暢也先生は話される。本講演では、やめさせようとしない依存症治療の実践から得た患者と信頼関係を築くことの大切さや、依存症からの回復に大切なものについて語っていただく。後半では質疑応答の時間を設けており、日々の支援の中で抱える悩みや不安などについて講師や参加者とともに考える時間としていきたい。

依存症支援は決して特別なものではない。本講演が、人と人が向き合い一緒に悩みながら信頼関係を築いていくという対人援助職の本質を今一度考える機会となること、そして一人でも多くの方が恐れずに依存症支援に一步踏み出していただく機会となることを願っている。

【司会・コーディネーター】

今岡 岳史（いわくら病院 医師）
亀ノ上美郷（新阿武山病院）

【講師】

成瀬 暢也（埼玉県立精神医療センター 副病院長）

分科会④ 11月24日（日）10：00～12：30 尋真館Z41

今こそ家族支援を

依存症をよりよく理解するためには、本人と家族の声や語りを聴くことは必須である。

今、私たち支援者は、ひとり一人の依存症者を深く理解し支援していくために、本人や家族にこころを寄せて、その声を、語りを、聴けているだろうか。相手の身になり受けとめられているだろうか。

これまでにも「人間関係の病」でもある依存症についての最適な支援には、「本人支援」と「家族支援」が車の両輪のように取り上げられることの大切さが求められてきていた。しかし、コロナ禍以降、家族プログラムが再開されていないところも多い。また、家族プログラムがあっても、担当者が決まっていなかったり、家族の個別支援を実施していなかったりするところも多い。

「家族支援」が依存症支援の車の両輪と位置づけられているものの、徐々に中身は希薄になり衰退しているのではないか。「家族支援」は「本人支援」を支え見守る、また「本人支援」は「家族支援」を支え関係づくりを育てる、という好循環が機能しなくなっているのではないか。そして、これは家族支援は採算が取れないというシステムの問題だけなのだろうか。

今、一度、私たち支援者の“聴く力”、“相手の身になって受けとめるあり方”を振り返りイメージしてみよう。回復の両輪を点検してみよう。「家族支援」と「本人支援」の相互作用に注目しよう。「さあ、今こそ家族支援を!!」

【司会・コーディネーター】

山本 哲也（小谷クリニック 精神保健福祉士）

入江 泰（NPO法人 京都マック 精神保健福祉士）

【基調講演 講師】

竹村 洋子（竹村診療所 臨床心理士/公認心理師）

【話題提供】

入江 泰（NPO法人 京都マック 精神保健福祉士）

武市 智子（京都府断酒平安会 家族会みやび）

竹村 洋子（竹村診療所 臨床心理士/公認心理師）

松浦 千恵（安東医院 精神保健福祉士）

分科会⑤ 11月24日（日）10：00～12：30 尋真館Z42

つながりにくい当事者に悩んでいませんか？

～メンタライジング・アプローチの勧め～

メンタライジングとは、「人間の行動を志向的心理状態（例えば、欲求、願望、感情、信念、目標、目的、理由）の観点から知覚し、解釈すること」（Allen & Fonagy, 2006）と定義されている。その対象は他者だけでなく自己をも含む。メンタライジングによって支援者の患者への理解が進むと、患者の中に支援者への信頼が形成され、患者は感情を統制することが可能になると考えられる。メンタライジングが機能しないと、患者はしばしば心の苦痛を自傷行為や物質乱用などの方法で解消しようとするが、それらの行動は支援者の不安を高め、支援者の余裕を失わせやすい。このような場合、支援者は患者の心の状態に目を向けられなくなるばかりか自分自身の心の状態にも気づくことができなくなってしまう（非メンタライジング状態）。その結果、場合によっては支援者が患者に対し陰性感情を持つことになり、治療につながりにくい患者をさらに治療から遠ざけることになるかもしれない。

当分科会では、支援者の非メンタライジング状態は当然起こりうるものとして、それを回復させるための手段として英国で考案された Thinking Together（協同思考法、以下 TT）を取り上げたい。TTは支援者同士で非メンタライジングが起こった場面について話し合い、支援者のメンタライジングを回復させるための手法である。

協同思考法で重要なのは、非メンタライジングが起こった場面の患者の言動でなく、支援者の精神状態をほかのチームメンバーの助けでメンタライジングすることである。

当日は、TTに関する解説を行い、小グループに分かれて実際に TT に取り組んでいただく予定である。そのため、参加者の皆様にはご自分が非メンタライジングに陥った体験（患者に陰性感情を抱いたなど）をグループで共有していただくことをお願いしたい。

【文献】Allen, J.G., & Fonagy, P. (2006) “The Handbook of Mentalization-Based Treatment” Chichester: John Wiley & Sons (「メンタライゼーション・ハンドブック—MBTの基礎と臨床」 2011 犬野力八郎監修 池田暁史訳 岩崎学術出版社)

【司会・コーディネーター】

大浦 邦康（いわくら病院）

兼松孝輔（リカバリハウスいちご尼崎）

【ファシリテーター】

大橋 良枝（京都文教大学）

佐藤 佳子（醍醐病院）

須磨 知美（大阪府済生会千里病院）

牧野 友也（いわくら病院）

分科会⑥ 11月24日（日）10：00～12：30 尋真館Z43

相談拠点と治療拠点機関・専門医療機関、時代と共に変わりゆく課題

～10年先を見据えて、今できること#継承#育成#土台作り#それ以前の地道な活動～

依存症は、適切な支援により回復が十分可能な疾患とされているが、適切な支援を提供することや人材育成の機会が限られていることが全国的な課題として挙げられてきた。

アルコール健康障害に関しては、平成26年6月1日施行のアルコール健康障害対策基本法に基づき、平成28年5月31日にアルコール健康障害対策推進基本計画（第1次）が閣議決定。

薬物依存症に関しては、平成28年12月14日施行の再犯の防止等の推進に関する法律に基づき、平成29年12月15日に再犯防止推進計画（第1次）が閣議決定。

ギャンブル等依存症に関しては、平成30年10月5日施行のギャンブル等依存症対策基本法に基づき、平成31年4月19日にギャンブル等依存症対策推進基本計画（第1次）が閣議決定。

以降、各府県にて各依存症対策に係る計画が策定され、相談拠点や治療拠点機関・専門医療機関を設置、依存症の適切な支援の裾野を広げていくことに尽力してきた。

そうすることで、誰もが依存症を含めた関連問題を正しく理解し、当事者や家族が偏見に悩まされないまちづくりを目指してきたと考える。

この数年間それが運営する中で、時流の対応への迷いや様々な課題が蓄積してきた。

その内容は、各府県の現状や分野の性質によって様々であるが、相談や診療の汎化、それらの継承を目的とした後進の育成、関連事業の運営、“拠点”や“専門”という言葉が先走るが故のジレンマ等、所属内外で共通する点は多々あると考える。

こういった課題に他の機関がどう対応しているか、情報交換する機会は少ない。

本分科会では、それが抱える課題や迷い等を話題提供した後、グループワークを通して意見交換していく。

各機関それぞれの運営の一助となれば幸いである。

相談拠点や治療拠点機関・専門医療機関で活動する全ての職種の方にご参加いただきたい。

【司会・コーディネーター】

佐藤 周（滋賀県立精神医療センター）

森下 淳（京都府立洛南病院）

分科会⑦ 11月24日（日）13：30～16：00 尋真館Z31

ギャップはどこにあるのか！？トリートメントギャップを埋める試み

—京都府北部・専門医療機関のない地域における実践を通して—

「トリートメントギャップ」

日本においては 100 万人以上の人人がアルコール依存症疑いと推計され、その内アルコール依存症の専門外来に来られているのは 4～5 万人と言われている。まだ専門医療にたどり着いていない人たちに専門医療にアクセスしてもらうにはどうしたら良いのだろうか。

一般医療機関でアルコールの問題がある人たちを早期に発見し、早期に繋げてもらえば・・・そのためには一般医療機関の医師やコメディカルにアルメガネ^(*)1)をかけてもらってアルコール問題に早期に気づいてもらおう！そのような構想を持って京都府は早期発見早期支援のための取り組みを 2021 年度より行ってきた。その中で見えてきたものは、トリートメントギャップは一つではないということ。一般医療機関においても消化器内科のある医療機関とそうではない医療機関でギャップは異なるし、京都市のような専門医療機関がある地域とない地域でもギャップは異なる。

昨年度より京都府北部に位置する綾部市において、トリートメントギャップを埋めるための取り組みを行ってきた。そこで見えてきたものは、総合診療科の医師、精神科の医師がそれぞれの立場でアルコール医療に対して忸怩たる思いでいたことであった。この思いを分かち合うことから専門医療のない地域でのアルコール診療のスタートである。一人の医師、一つの医療機関で地域のアルコール診療を担うのは困難であることは容易に想像できる。その医師らの思いを聞きながら、専門医療のない地域でのトリートメントギャップを埋めるために必要なものを考えていく分科会にできたらと思っている。

(*)1) 「アルメガネをかける」とは、アルコールの知識を持って関わること

【司会・コーディネーター】

松浦 千恵（安東医院 精神保健福祉士）

【話題提供】

玉木 千里（京都協立病院 院長 総合診療科医師）

山野 純弘（NHO 舞鶴医療センター 精神科診療部長）

安東 豊（安東医院 院長 精神科医師）

安岡 綾（京都協立病院 MSW）

【分科会⑧】 11月24日（日）13：30～16：00 尋真館Z41

ハームリダクションについて考える

知っているようで実はよく知らない「ハームリダクション」という言葉。本分科会では、ハームリダクション東京の共同代表のお二人を講師としてお招きし、対話を重視したワークショップ形式で、「思い込みの概念外し」をキーワードに進行していく。

講師の上岡・古藤が取り組むハームリダクション (Harm Reduction) は、日本社会で差別と偏見により蔑まされている当事者とその家族など身近な人が、あたりまえに暮らす権利を取り戻すための社会運動である。ここでの当事者とは、薬物を使用することがある人 (People who Use Drugs) となる。薬物使用に伴う被害（ハーム）を減らす（リダクション）ことを目的とし、最も優先されるのは、スティグマにより社会的に追いやられている当事者らの命と尊厳だ。薬物摂取そのものをハームとするのではなく、公衆衛生と人権擁護の観点からハームを減らそうとする。たとえば海外では薬物を摂取する際に用いる衛生的なグッズを配布するサービスがある。これは公衆衛生上の目的だけではなく、差別・偏見に苦しめられる当事者にアウトリーチし、心理社会的な支援を提供するという人権擁護の側面も大きい。ハームリダクション東京が日本での活動でイメージするのは、スティグマが根深い日本社会におけるオンライン空間のシェルター（避難先）だ。敷居の低いサービスを提供することで、いま市販薬や処方薬をオーバードーズ（OD、過量摂取）する若者や女性にもたくさん出会う。やめられない現実に直面しているときに、どうやめられるかだと話は続かない。しかし、やめようとしているいま、どう使うかなら話しやすくなる。また、セーファーな使用（OD）について話せるチャンスができる。

本分科会では、薬物使用や OD をする当事者とハームリダクションのサービスで出会う講師のお二人から理念と実践を学び、参加者とともに対話を重ねていく。

【コーディネーター】

野村裕美（同志社大学社会学部 教授）

榎原節子（京都マック 施設長）

朝比奈寛正（兵庫大学生涯福祉学部 准教授）

【講師】

上岡陽江氏（ダルク女性ハウス顧問・ハームリダクション東京共同代表 精神保健福祉士）

古藤吾郎氏（ハームリダクション東京共同代表 精神保健福祉士）

分科会⑨ 11月24日（日）13：30～16：00 尋真館Z42

自助グループを知る～体験談から依存症支援を考える～

皆さんはご自身の体験談を語った経験はあるでしょうか。自助グループに繋がっている方々は、自らの言葉で自分のことを語り、仲間との分かち合いを通して回復の道を歩み続けておられます。今まで誰にも言えずに一人で抱え続けてきた自分の想いを言葉にして語ることは、決して簡単なことではありません。依存症支援に携わるさんは自助グループの中にある回復に出会い、その大切さを感じているものの、実際に自助グループに繋がっていただくことの難しさに直面した経験があると思います。そこには、体験談を語ることの難しさという壁があるのではないでしょうか。

本分科会では、自助グループの皆さんや援助職の皆さんがそれぞれの所属や肩書から離れ、参加者全員が一人の人として自分の体験談を語り、分かち合う経験をしていただきたいと思います。なぜ自分はここにいるのか、どんな道を歩んできたのかなど、グループに分かれて体験談を語るという経験を通して、新たな自分や価値観などに出会えることを期待しています。

後半には自助グループ8団体の皆さんからグループ紹介をしていただきます。自助グループのことを知らない方も、参加経験のある方も、自分事として自助グループを知る機会になると思います。多くの方のご参加をお待ちしております。

【司会・コーディネーター】

亀ノ上 美郷（新阿武山病院 精神保健福祉士）

秋山 賴斗（いわくら病院 精神保健福祉士）

ワークショップ② 11月24日（日）10：00～16：00 尋真館Z40

明日から使える動機づけ面接 ～アルコール依存症にかかる原点として～

相手を変えようとすればするほど、かえって抵抗や否認を強めてしまった苦い経験はありませんか?人が変わってゆく過程をどう支援すれば良いでしょう？

「動機づけ面接」は、問題飲酒へのアプローチから生まれ、「直面化」中心だった依存症の治療を大きく変えました。今では、依存症領域だけでなく、医療・保健・福祉・司法・教育などの対人援助職が学ぶべき基本的な面接法として、日本でも広がっています。

関西アルコール関連問題学会では、2011年から講師に後藤恵先生（ミラーとロルニックの著書「動機づけ面接法」「動機づけ面接法実践入門」の翻訳者）を迎えて、ワークショップを開催してきました。「わかりやすい」「すぐ使える」と大好評で、要望に応えて継続的に開催してきましたが、残念ながら、コロナ禍のため2019年奈良大会を最後に中断していました。

今回は5年ぶり、8回目の開催となります。後藤先生には豊富な臨床経験を元に、アルコール依存症にかかる原点として、面接技法だけでなく、支援者としてのあり方を話していただきます。そこには、「変わりたいけど、変わりたくない」という両価性を抱えた相手に、支援者がかかるときの普遍性があることでしょう。

初めて学ぶ方だけでなく、リピーターの方も久しぶりに参加して、実践的なロールプレイを楽しみませんか？

【司会・コーディネーター】
奥田由子（守山こころのクリニック 公認心理師）

【講師】
後藤 恵（市ヶ谷みぎわ心のクリニック 医師）

京都大会参加申し込みのご案内

<申し込み方法>

Peatix（＊）による申込方法となります。

右記の QR コードより申し込みください。

* 大会参加の申込と併せて、各プログラムの参加申込もございます。

* 事前に希望するプログラムを選択してください。

* 自主企画①②に関しては、事前予約は不要となります。

（＊）Peatix とは、Peatix Japan 株式会社が運営しているイベント管理システムです。

<受付期間>

令和 6 年（2024 年）8 月 30 日（金）～11 月 9 日（土）まで

<京都大会ホームページ・URL・QR コード>

<https://peatix.com/event/4111647>



<参加費>

本学会個人会員：4000 円 非学会員：5000 円 当事者・家族・学生：1000 円

懇親会：11 月 23 日（土）5000 円

<大会事務局よりお願い>

- 1, 本学会個人会員は、団体会員を含みません。事前に確認の上、申し込みください。
- 2, 参加費の支払いは、申し込み時に発生します。
- 3, 申込みされていない方の参加はお断りします。
- 4, すべてのプログラムにおいて、録画・録音・撮影・SNS 等への掲載は禁止します。
- 5, 後援団体への報告等を目的として、大会実行委員のみ撮影を行いますが、個人が特定されない形での撮影といたしますので、ご理解願います。
- 6, 本学会の許可なく関連広報することは禁止とします。
- 7, 学会内での販売は禁止とします。
- 8, 会場には駐車場はございません。公共交通機関でお越しください。

京都大会の円滑な運営のため、皆さまのご協力をお願いいたします。

<問い合わせ>

大会事務局：医療法人稻門会いわくら病院（担当：杉山）

TEL：075-711-2172（代表）

Email：kyoto2024kanarugakkai@gmail.com

第30回 関西アルコール関連問題学会京都大会 大会実行委員（敬称略）

<大会長> 吉岡隆一（洛南病院 院長）

<副大会長（兼大会事務局長）> 今岡岳史（いわくら病院 生活支援課長）

<大会事務局> いわくら病院

秋山頼斗、今村英樹、大浦邦康、杉山昌儀、須堯麗子、パーカー莉乃、橋本健之、疋田康

<本学会役員>

学会長 和氣浩三（新生会病院）

副学会長 廣兼元太（広兼医院）

副学会長 佐古恵利子（リカバリハウスいちご）

学会事務局長 渡辺孝弘（新生会病院）

学会会計 山本哲也（小谷クリニック）

学会監事 川田晃（川田クリニック）

<大会実行委員会・本学会幹事★>

麻生克郎（垂水病院）★

石川智恵（安東医院）

入来晃久（大阪精神医療センター）★

上田真生子（洛南病院）

榎原節子（京都マック）

太田裕美（東布施野田クリニック）★

岡正徳（京都マック）

置塙紀章（ひょうごこころの医療センター）★

籠本孝雄（大阪府こころの健康総合センター）★

亀ノ上美郷（新阿武山病院）★

幸地芳朗（幸地クリニック）★

小林正英（ひょうごこころの医療センター）★

佐々木啓太（御坊保健所）★

佐藤周（滋賀県立精神医療センター）★

竹村洋子（竹村診療所）

永井義雄（堺市健康部）★

野村裕美（同志社大学）

濱川浩（滋賀県立精神医療センター）★

牧野由香（滋賀県精神医療センター）

宮田尚美（垂水病院）★

森下淳（洛南病院）

山田和子（大阪市こころの健康センター）★

安東毅（安東医院）★

入江泰（京都マック）

岩田こころ（小谷クリニック）

植松道直（植松クリニック）★

大阪一樹（洛南病院）

大西英周（三光病院）★

岡島明子（洛南病院）

奥田由子（守山こころのクリニック）★

兼松孝輔（リカバリハウスいちご）★

北山紗恵子（安東医院）

小谷陣（小谷クリニック）★

笹川智司（奈良市保健所）★

佐谷誠司（新阿武山病院）★

宋慎平（宋神経科クリニック）★

鶴身孝介（京都大学大学院）★

野田哲朗（東布施野田クリニック）★

波床将材（豊郷病院）★

藤井望夢（藤井クリニック）★

松浦千恵（安東医院）

三好弘之（大阪保健福祉専門学校）★

森田佳寛（和歌山県立こころの医療センター★

吉岡敏克（京都マック）